



念仏者の言葉

なければないで苦しみ

あればあるで苦しむ



『仏説無量寿経』というお経に次のような言葉があります。

「田あれば田を憂う。宅あれば宅を憂う。中略。田なければまた憂えて田あらんと欲う。宅なければまた憂えて宅あらんと欲う」。田んぼや家があればそれを失っていく不安による苦しみや、更にもっと欲しいという苦しみは絶えません。逆に田んぼや家が無ければそれを欲しがり求めるところが治まらずに苦しみ続けます。結局は「ある」「ない」ともに苦しみを生み出し、私たちの生活は落ち着くことがないということです。これはお釈迦様が見抜かれた人間の本质ではないかと思えます。お釈迦様が生きておられた二千五百年前も現在も人間の本质は同じです。まず私たちはすぐに足りないところに目が行きがちです。「私の人生にはこれが足りない。あの人と比べてこれが足りない。思い描いたものと比べてこれが足りない」という状態です。更に足りないと思っていた事が手に入れば、それに満足せずに更に新たなものを求めなくてはならなくなります。動機付けには良いかもしれませんが、結局は落ち着くことが出来ません。

そんな時にお釈迦様は「少欲知足」(欲少なく、足を知る)が大切であるとおっしゃっています。人間は死ぬまで欲の心を無くす事は出来ませんが、欲の心は程々にして既に足りているという事を自覚していく事が、落ち着いた日々を過ごしていく為には大切な事であると思えます。



十一月のある日の北日本新聞に興味深い記事がありました。それは南砺市で「看<sup>かんぶつれんけい</sup>仏連携」の勉強会が開かれたという記事でした。「看」とは看護の「看」、「仏」とは仏教の「仏」です。これは心穏やかに終末期を迎える社会づくりの為に南砺市の訪問看護ステーションと、真宗大谷派の高岡教区が企画したものです。つまりは人間として誰もが直面していく老・病・死というものを、医療と仏教が連携して考えていこうというものです。講師は私も以前にご指導を受けた事のある仏教学者の田代俊孝先生でした。現代の日本人は特に死生観の意識が乏しいことは以前より指摘されていますが、このような企画によって考える機会が増えていく事は素晴らしいと思います。

少しでも健康で長生きして、そのうちに迷惑を掛けないように死を迎えたいという事が当たり前の価値観となっていると思います。テレビ番組でも健康に関するものが多く、現代の医療や私たちの興味はどのようなにして「健康寿命を延ばしていくか」ということです。しかしどれだけ医学が進歩して健康に気を付けていても仏教の考え方では、人間

は生まれた限りは必ず年老いていき、必ず病を患い、必ず死を迎えるというものです。それはいつどうなるかわからないというものです。明日かもしれないし、まだ先かもしれないし、絶対に思い通りにはならないものです。認知症研究の第一人者の著名な先生が現在認知症を患っています。「私は絶対に介護は受けたくない」と言っていて人一倍健康に気を付けていた方が、現在は寝たきりになり自宅で介護を受けています。私たちは自分が必ず老・病・死を迎えるということは頭では知っていますが、死を考えずに遠ざけて目先の生の充実を図る事が全てだと思っていないでしょうか。

そんな時に私は癌<sup>がん</sup>によって夫と子供三人を残して四十歳という若さで亡くなられた鈴木章子さんの事が思い出されます。鈴木さんはお寺の坊守<sup>ぼくもり</sup>でしたが乳癌<sup>がん</sup>を患い切除するも肺に転移し、摘出するもその後各所に転移して亡くなられました。私たちの死生観では老いや病や死は「マイナス」、若さや健康や生は「プラス」です。もしその価値観が正しければ若くして病で亡くなるという事はそこには絶望しかないということになってしまします。しかし私たちはいつどうなってもおかしくない「い

のち」をいただいて生まれてきました。そして鈴木さんは死という絶対に思い通りにならない真実と真剣に向き合う事を通して、死を忘れて生きている自身の自惚れ(うぬぼ)れに気付かされ、良し悪しの価値観が覆され、結果的に穏やかに境遇を受け入れていきました。癌(がん)との出会いによって「本当の生」がスタートしたとおっしゃっています。鈴木さんのお話を聞いていると、死を通して生を見つめる事の大切さを学ばされます。この価値観を転換し、自身の境遇があるがまま受け入れる気付きを与えるはたらしきが、私たちに対する呼びかけである「南無阿弥陀仏」のお念仏であると思います。私の先生は「何故仏教を勉強したり、日頃から法話を聞く必要があるかという点、本当の事に出会ったときに通り過ぎてしまわない為だ」とおっしゃいました。鈴木さんの場合は死という避ける事の出来ない真実に出会ったときに、ただ悲しみに暮れて終わるのではなく、悲しみの果てに実はその病氣こそ自分が自分を本当に生かすはたらきであると気付く事が出来ました。その気付きによって生きる意味が変わったのです。私たちは実は日々大切なことに出会っていながら、一喜一憂しただけで通り過ぎていませんか。まさにそれ

こそが「ボーっと生きている」という事になります。実はその一つ一つが私の目を覚ますための目に見えない仏さまの「今現在説法(こんげんざいせっぽう)」であるはたらきといただけるか。または一喜一憂しただけで通り過ぎていくか。その違いはとてつもなく大きいと思われまます。

### 年忌表



法事は亡き人を偲び、同時に亡き人からの大切な願いを確かめていく仏縁の場です。新型コロナウイルスの感染防止の観点から、三密を避ける為に広いお寺の本堂を使用し、法事を勤める方も増えています。

今年の年忌表は左記の通りです。法事の執行を希望される方はお寺までご連絡ください。

#### 法要名・亡くなられた年

- 一周忌・令和2年(2020)、三回忌・平成31年・令和1年(2019)
- 七回忌・平成27年(2015)、十三回忌・平成21年(2009)
- 十七回忌・平成17年(2005)、二十三回忌・平成11年(1999)
- 二十七回忌・平成7年(1995)、三十三回忌・平成元年(1989)
- 三十七回忌・昭和60年(1985)、四十三回忌・昭和54年(1979)
- 五十回忌・昭和47年(1972)

## 坊守日記



本年もどうぞよろしくお願いいたします。昨年は新型コロナウイルスの拡大のために世の中の様々な行事が中止になりました。そんな中ではありましたがお寺の三本柿にたくさん柿が生りましたので、干し柿にして御正忌の際に参詣の皆さんに配りました。天候がよかった事もあり、とてもきれいな干し柿が出来上がりました。今年は規模を縮小して近所の子供たちを二、三人集めて収穫から行いましたが、来年はもっとたくさんの子供たちと一緒に作れたらと思っています。毎年の何気ない日常がとても恋しく思います。去年はお講を中止したりと、お寺の行事もコロナ禍の中でどのように行っていくかを考えた一年でした。まだまだ普通の日常を取り戻すには時間がかかりますが、今だからこそ出来ることもたくさんあるはずです。日常の出来ることを大事にしながら、毎日を一生懸命過ごしていきたいと思っています。



## 編集後記



令和三年となりました。本年もどうぞよろしくお願いいたします。昨年は今まで経験したことのない未知のウイルスとの闘いがありました。現在も感染流行が続いています。今年はおリンピックが開催予定です。課題も多く開催が危ぶまれています。夢や希望の大切さをこの一年で実感しましたので、何とか成功させたいものです。

また昨年は個人的にも大きな転機となりました。退職してお寺の法務に専念することになりました。いきなり緊急事態宣言の発令があつて戸惑いましたが、新たな試みとして毎月の「徳朋」の発行、ホームページの制作、定例法座の開催という三つを行う事ができました。改めて仏の教えがあつてのお寺だと思えます。また初めて報恩講回りに参加させていただきましたが、多くの門徒の方より激励の声をいただき、感激しました。今後も「お寺は何の為にあるのか」という原点に立ち、更なる活動をしていきたいと思えます。

派谷 聖跡寺  
宗大 聖人の  
親鸞 柿  
三本

## 辻徳法寺

〒938-0031

黒部市三日市3214

TEL・FAX(0765) 52-0791

ホームページアドレス

<https://www.tokuhoji.net/>

